

## ラテン語こぼれ話

カルペ・ディエムという言葉

山下太郎

時間に関する格言、警句は古来たくさんある。中でも「時間を大切にせよ」というメッセージがとりわけ多い。漢文では「少年老い易く、学成り難し。一寸の光陰、軽んずべからず」というのが有名である。英語では、Time flies like an arrow. (光陰矢のごとし) Time is money. (時は金なり) などがある。

ミヒヤエル・エンデの『モモ』を読むと、Time is money. と血眼(ちまなこ)になるのは灰色の紳士であり、時間泥棒の立場ということになる。むしろ、時間とは人生そのもの、命そのものであり、「生きられた」時間の深浅をこそ問題にすべし、というメッセージがこの作品からは聞こえてくる。

時間を計測する「腕時計」のことを英語で watch というが、この言葉は同時に「見張り」という意味をもつ。文明国の大人は腕時計を見て暮らすのが当たり前になっているが、比喩的に言えば、時計(ウォッチ)という監視役に睨まれながら生きていることになる。たしかに、Time is money の考えに立つとき、時計は不可欠であるが、一方で美しい音楽に魅了されるとき、あるいは親しい友人と夢中になって話し込むとき、またはアルバムを広げて過去の思い出に耽るとき、われわれは時間のたつのを忘れる。つまり、腕時計を必要としない時間というのは確かにある。

このように時間と人間との関わりについて考えるとき、「一期一会」という言葉を思い出す人も少なくないだろう。この言葉をつぶやくとき、「人生は一度限り。人との出会いも一度限り」という認識を新たにすることができる。過ぎ去った時間は二度と戻らない、ゆえに、今この瞬間、この人との出会いはかけがえのない価値をもつ、と。

一方、「カルペ・ディエム」(carpe diem.) というラテン語は、今挙げた「一期一会」ととともに引用されることが少なくない。元々は恋愛をモチーフとしたホラティウスの詩に見られる言葉である。

どんな文脈で使われているのか知っていただくため、訳をご紹介します。

( 巻末 20 ページへ続く )

# クラス紹介

今月号は、平成19年度春学期の授業をふりかえり、また来学期からの方針について、それぞれのクラスの先生が日頃何を大切に考え、どのような授業を展開しているのかを、「クラスだより」として寄稿していただきました。(以下の時間割は現在のもです。秋学期の時間割については別紙をご覧ください)

## 時間割

春学期 (平成19年度4月～7月)

(各クラス5名まで)

	4:10-5:10	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
火	しぜん* (低学年&高学年)	ことば3年 ことば5~6年	中1~2・日本語の読み書き 中3・数の基本	中1・英語の読み書き 中3・日本語の読み書き
水	ことば1年	かず1~3年	中3・英語の基本 高1・英語の基本	高校・数の世界 ラテン語初級講読 ラテン語中級講読A
木	ことば2年 かず4~6年	ことば4年	中1・数の基本 中2・英語の基本 高2~3・英語の基本	中2・数の基本 ウェブプログラミング入門
金				ラテン語入門 ラテン語中級講読B

\*「しぜん」は、3:50～5:20、隔週の授業です。

### 小学生の部

『ことば』	低学年 (1年)	山下太郎
	低学年 (2年)	山下太郎
	中学年 (3年)	福西亮馬
	中学年 (4年)	浅野直樹
	高学年 (5~6年)	某
『しぜん』	低学年 (1~2年)	山下育子・山下太郎
	高学年 (3~6年)	山下育子・山下太郎
『かず』	低学年 (1~3年)	福西亮馬・下村麻紀子
	高学年 (4~6年)	福西亮馬

### 中学生の部

『日本語の読み書き』	中1~2	某
	中3	某
『英語の基本』	中1	山下太郎
	中2	山下太郎
	中3	山下太郎
『数の基本』	中1	浅野直樹
	中2	浅野直樹
	中3	福西亮馬

### 高校生・一般の部

『日本語の読み書き』	高1~3	
『高1英語の基本』	高1	下村麻紀子
『高2~3英語の基本』	高2~3	Fujita
『高校・数の世界』	高1~3	福西亮馬
『ウェブプログラミング入門』	高~一般	Fujita
『ラテン語入門』	高~一般	前川 裕
『ラテン語初級講読』	高~一般	前川 裕
『ラテン語中級講読A』	高~一般	山下太郎
『ラテン語中級講読B』	高~一般	山下太郎

講師が「        」のクラスは、受講希望者が2名以上集まった時点で授業開始を検討いたします。

# 「しぜん」

担当 山下育子・山下太郎

## はじめに

今年度、しぜんクラスは賑やかに総勢15名でスタートしました。しぜんクラスとしての仲間意識も十分に芽生え、毎回力一杯自然に触れる活動をしています。今学期を通して驚きと感心を隠せないことの一つは、毎回提出する『しぜん日記』の内容です。全員の提出物を重ねると一冊の束になるほどですが、ひら仮名を書き始めてそう間がない1年生にもかかわらず、一字一句一生懸命の取り組みがにじみ出ている鉛筆の大きな字で、日頃の自然体験の一こまを精一杯に伝えてくれます。また、先輩たちもよい意味で後輩に負けじと前年度に続いて日記を提出しています。こうした小学生たちのひたむきな努力には胸がいっぱいになってきます。ユニークな表現は笑いを堪えながら拝見し、赤ペンでコメントや感想を記入させていただいております。しぜんクラスの子もたちの取り組みの様子すべてをここでご紹介したいところですが、その一端でも垣間見ていただければ幸いです。

## 4月のあるクラス テーマ “ようこそ！ こんにちは！”

4月17日(火)3時50分になり、次々と懐かしい笑顔が山の教室に集まりました。大勢の1年生を迎え、3、4年生上級生も新しい仲間が増えることをとても楽しみに待っていました。女の子も二人、メンバーに加わりました。嬉しかったですね！さあ、いよいよしぜんクラスの再スタートです。



まずは上級生より順に自己紹介です。 しぜんについて自分の好きなことも一つずつ伝えます。



その場に立って、学校名、氏名につづいて、自分の好きな物(食べ物でもよい)を伝えていきます。



大きな声でしっかりと言えました。 終わったら拍手です。みんなの名前をおぼえられたかな？



では、しぜん日記の用紙を配ります。後半は外へ出てリーダーを先頭に、ゆっくり「春めぐり」です。

クラスでの自己紹介に続いて、山の学校グリーンのバインダーファイル、しぜん日記を一人ずつに配りながら使い方を説明しました。続いて、満開だった桜が咲き終わりのよいよ春本番を迎えたこの時季に、しぜんクラスで大切にしていきたいことについてお話をしました。

「目で、耳で、はだで、鼻で、口で・・・、春だなぁって感じるのそれぞれどんな時だろう？」

ちょうどその日にお山に咲いていた「沈丁花、桜、タンポポの花」を入れた花瓶を机の上で順に回しながら考えてみました。その後、先輩リーダーを先頭に5人ずつ3つのグループに分かれて、山の中に「それぞれの春」を見つけにでかけました。ゆっくり歩いてまわりの景色をよく観察し、風の音、鳥の声、花の香り、草いきれ、落ち葉の堆積した地面の柔らかさなど、自然が表すさまざまな姿を体全体をアンテナにして五感をフルに発揮して見つけてみましょう。

「なぜだろう？」という疑問が見つかればとてもラッキー！なこと。答えはきっとそのうち見えてきます。そんな、自然の中でのいくつかの発見(例えば登校中につばめの巣を発見したこと、家のお庭で花のつぼみをふと見つけたこと・・・etc.)は、必ず心を豊かにしてくれるでしょう。そしてその発見をしぜん日記にスケッチしたり文章にして、印象に残ったことをみんなに伝えてみましょう。しぜんクラスでは、自然を大切に思う仲間とともに、さまざまな体験を重ね、自然の中で生き生きする子どもたちの好奇心を大切に育てていけたらと願っています。

### 5月のあるクラス テーマ “野生イノシシのけもの道をたどって、ハーブを摘みに！”

この日のはじめは、しぜんクラス卒業生がクラスに届けてくれた「アゲハチョウ2齢幼虫～3齢幼虫」を観察しました。幼虫と言うより、黒に白が混ざり何だか鳥のフンのようですが、ミカンの葉の柔らかな部分から上手く食べて日毎に大きくなっていました。続いて、「しぜん日記を書いてきた人は出してください」と言うや、「待ってました！」とばかりニコニコの笑みを浮かべながら次々に提出してくれるのには、太郎先生も私も目を丸くして驚きました。やはり重ねると束になるほどの枚数なので、この日は数枚を選びこちらで紹介した上でお預かりすることにしました。(詳細をお伝えしたいところです)



幼虫に触ってみる



頭をついたら肉かくを出して驚くアゲハ ミカンのとげは痛いよ



持参の図鑑で調べてみる



真剣な眼差しで聞く



にこやかにピース、よし鉛筆で書きとめておこう



「はいっ」と手をあげます  
<しぜん日記紹介中のこと>



次に、5月8日のクラスで土を掘り起こし柔らかくして新しい土と肥料を混ぜて「さやいんげん」と「二十日大根」を植える作業を済ませましたが、その後、すくすく育っている様子を観察しながら、子葉から本葉へ成長途中の芽を等間隔になるように間引き作業しました。



なかなか難しいなあ



これとこれを抜いたら



たくさん育ったね



うーん、これでよし

間引きが済めば、次はいよいよ山の中に入り“けもの道”をたどりましょう。



ゆっくり下ります



笹の積もった竹やぶ



竹を掴んでさらに下へ



私って、身軽でしょう！



ゆっくり下りれば大丈夫



一番下についたよ



うわあ、たっかいなあ！



ここからが、けもの道だ



イノシシとシカのフンだ！



そのまま道を歩くと



レモンバームでいっぱい！



4、5本束ねよう



ふうん？これがハーブ



やった！いっぱいゲット



では、次のグループさん



採れたらもどりましょう



葉っぱをパーンと叩く



そしてお水に浮かべると



うん！いけるねー



浮いてる、きれいね



きょうの冒険に乾杯！



きゅうけいだね



僕は苦手やなあこの味・・・



飲んだらコップ重ねます

山道から竹やぶへ入り、目、手、足の感覚をフルに使っての行程でした。大人でも容易ではない場所で、仲間に励まされたり手を取り合ったりしながらの、正に冒険と言える体験でした。けもの道では、細長いイノシシのフン、またすぐ近くにはコロコロした丸いシカのフンが2カ所に落ちているのを見つけ、この周辺にも野生動物が確かに現れていることを目で見て確認しました。

収穫したレモンバームの束を手にお山の石段へ戻ってきた時には、さすがに皆ひと安心した表情でした。早速各自がコップに冷たいお水を注いで、レモンバームの葉1枚をパチンと手の平で叩いてコップに浮かべると、ほんのりよい香りがする「レモンバーム水」ができました。暑い日には、美味しかった？ レモンバームは、ミントなどとミックスしてたっぷりの生葉に熱いお湯を注いでしっかり抽出した後飲んでも美味しいし、氷でアイスティーもOK。陰干しのドライハーブティーにしても、ドクダミやスギナを混ぜても美味しいです。[レモンバームは薬草の一つ、脳と神経(消化器)の強化剤としての効能有、うつ病、喘息、気管支炎ほか]

6月のあるクラス テーマ “フォレストアーツの活動 基地をかくにんする”

6月5日(火)、この日は「ジュニア・フォレストアーツ」(森の活動)について、本を見ながら進めました。上級生は今までの活動を振り返り、1年生は入門の第一歩として“ひみつの森”を訪ねることになりました。育てている野菜の成長を確認したら、園庭から山奥へ入ります。道々、上級生が説明してくれます。  
[今までの活動：森を探検する 森の手入れをする 森の基地づくりをする 森であそぶ]



ここまで登れるよ



奥の方へいってみよう



手入れをしたところだよ



この蔓はぶら下がるよ



なんだなんだ



そっちは気をつけて



やった！登れるぞ！



こわくない？



ほら、オオバヤシャブシ



では、川へ下ります



ほらっ、ヘビイチゴだ



カニがいるね、隠れた？



これ、なんだろう？



サワガニとカエルがいた



記念写真の後は教室へ戻るよ



もう、日記書くの？



ほくも今のうち書いとう



えっとなんだったっけ？



Rちゃんが海で拾ったヒトデ



今日の活動をまとめよう

6月のあるクラス テーマ “野菜を収穫しよう！ つづいて  
フォレストアーツの活動 竹のコップをつくろう！”

この日もお天気に恵まれました。Tくんが水槽に入った「トノサマガエル2匹」と「イボガエル」のお客さんを連れてきてくれました。近くの田んぼで見つけたそうです。絵本の『ふたりは友だち』を思い出すような仲良しがエルを、みんなで回して観察しました。また5月8日(火)に、しぜんクラス卒業生のSくん親子より届けられたアゲハの幼虫が、さなぎになった様子も観察しました。さらにこの日、“ノコギリカミキリ”を見つけて連れてきたのはRちゃん。図鑑で確かめた後、ちょうど“キボシカミキリ”について「しぜん日記」を記録してきたMちゃんに立って発表してもらいました。夏には多くの種類のカミキリムシが、お山にもいっぱい出てきます。

続いて、およそ1人1～2枚ずつ「しぜん日記」を順に発表してもらいました。この日の日記の内容をざっとご紹介しますと、

<p>お家で植えている植物、野菜の成長の記録          フォレスターズで木にぶら下がって遊んだこと          チョウをつかまえたこと          家で育てているヒマワリの成長記録          アゲハの幼虫がキンカンの葉っぱに5匹もいたこと          おばあちゃんの家でポポーの実を見たこと          3cmほどのアゲハの幼虫を見つけ、『チップ』と名付けて育てていること          カエルとオタマジャクシとハウネンエビを飼うことにきめたこと          トノサマガエルをつかまえて、びしょびしょになったけど楽しかったこと          トマトの実が赤くなってきて嬉しかったこと          砂防ダムでトノサマガエルとイボガエルとツチイナゴ6cm大を見つけたこと          マツボックリが、晴れているときと雨のときの違いについて          岩倉の公園でヒラタクワガタを見つけたこと          岩倉川にホタルが100匹ほどいて1匹つかまえたこと          カブトムシの幼虫がサナギから成虫になりかけようとしていること</p>	<p>近江舞子に行って釣りをしたこと          アジサイの花の実験をしていること          ホタルをつかまえて観察したこと          学校で育てているアサガオの様子          大なめくじを見つけたこと          ヘビトンボが家の庭にいたこと</p>
---	--

などで、内容はバリエーションに富んでそれぞれスケッチの絵も可愛らしくて大変ユニークです。



やった！ぼくから発表



思い出しながら発表しよう



これ、発表しようかなあ



しっばい、もう一回よむね



発表終了後、軍手、のこぎり、ビニール袋などの持ち物を持って外へ出ます。

まず、それぞれの成長具合をよく観察しましょう。日当たり、植わっている間隔が違うと実のつき方も違ったね。



大きくなったなあ



大きい実と小さい実



しっかり大きくなったわ



土つきの二十日大根だよ



一つずつ大事にいれよう



そーとぬけばいい？



やった！いっぱい採れた



ほしぐみ前に仮置き

3、4年生はさやいんげんを育てている途中ですが、二十日大根よりゆっくり成長中です。一つずつの株が二十日大根よりも大きく白い花が咲き、今後どのように実がなるのか楽しみにしているところです。次は、お山の青竹でフォレストアズ活動で使う、「マイコップ」を作ります。A、B、C班に分かれて、リーダー、副リーダーと一緒に作業に入ります。

**C班リーダー<Mくん、Hくん> 心遣いがやさしいリーダー**



みんなしっかり押さえてや



どのへんをコップに使う？



私、最後までがんばる



よっしゃー、切るぞ

**B班リーダー<Kくん、Uくん> あわてずゆっくり、慎重なリーダー**



支えを置いてゆっくり切る



こっち押さえとくから



やっとできたよ、ピース



先生も手伝うね

**A班リーダー<Kくん、Tくん> おれに任せろタイプの力強いリーダー**



竹はここに置こう



押さえといてくれよー



ふうん、そうするのか



みんなで力を合わせて



切れたよ、ほら



こういう感じで切るんや



まっすぐに刃を動かすよ



竹切りの音が響きます

<いま、青竹のマイコップは氏名を記入したあと乾燥中です>



次回しぜんクラスでは、この竹コップを細かなサンドペーパーで磨きます。もっと大きくしたらよかったとか、もう一個作っておけばよかった…など、今回の活動を振り返りながら楽しく作業しましょう。竹切りの作業は、要領が難しく大変力が要りますが、「私は、お母さんの子だから最後まで自分で頑張る！」と、手助けなく完成させたしっかり屋さんの女の子もいてとても頼もしく思いました。うまく磨けたら、もう一度スポンジで洗って仕上げましょう。

(文責 山下育子)

## 小学生・ことばの部

### 「ことば」1年生

担当 山下太郎

このクラスでは復習の時間を長くとっています。五十音順にひらがなを書き取ったり、俳句の文字をていねいに書き写す練習を何度も繰り返しています。勉強で大切なことは、「基本となることを飽きるまで繰り返すこと」だと思います。多くの場合、大人（親、先生）が根負けすることが多いようです（つい先を急ぎがちになります）。ひらがなを書き写すことは簡単なことであると誰もが考えがちですが、この考えは間違っています。「慣れ」が原因で雑に書いていないかどうか。何かを見ながら書き写しているのであれば、何も見ずに書けるかどうか。簡単に見えることでも、それを「どのように」こなしているかについて、ていねいに見ていく必要があります。何事も「最初が肝心」なので、私自身はやる心を抑えて子どもたちとつきあっています。

そうこうするうち、春学期も終わりに近づく頃、子どもたちの側から「漢字がしたい！」との声が上がりました。前回は漢字検定の問題集を使って勉強しました。小1なので10級です。検定問題の初めに「読み」のテストがあります。この問題文を利用して、音読の練習をしました。一つの問題文について漢字の読みの答え合わせを終えても先に進まず、問題文をつまらずに正確に読めるまで全員で声を合わせて読んでみたり、一人で起立して音読してもらったりしました。「読める人？」と聞くと全員が「はい！（ぼくに当てて）」と元気に返事してくれるので、このエネルギーを大切にしながら、漢字交じりの日本文をすらすら朗唱できるようにもっていきたいと思っています。

（文責 山下太郎）

### 「ことば」2年生

担当 山下太郎

毎回季節に応じた俳句を紹介し、その筆写と暗唱を中心に進めています。2年生の場合、プリントで紹介する俳句には漢字が混ざっています。筆写する際にはひらがなで写しても、漢字で写してもよいとあってあります。たとえば、「春の海 ひねもすのたり のたりかな 蕪村」を例に取りますと、「今日学校で『海』の字を習った！（だから漢字で書く）」、「『ぶそん』の『そん』は「村（むら）」やね」といった具合に、自然に漢字に挑戦する気持ちが芽生えるのを見守っています。春学期は6つの俳句を学びましたが、全部すらすら写せるようになった段階で、暗唱してもらっています。起立して皆の前で間違わずに朗唱するのは結構大変です。これができるようになると、今度は暗記した俳句の言葉を思い出して白い紙に書き写してもらいます。これもスラスラ出来るようになった頃を見計らって新しい俳句を一つ紹介する、という流れでじっくり取り組んでいます。俳句の取り組みが終わると、作文を書いてもらいます（早くできた子は挿絵も）。その後、時間が余れば、言葉遊び（「二十の扉」など）をしたり、絵本の読み聞かせをしたりします。

（文責 山下太郎）

このクラスでは、俳句、辞書、書き取り、朗読の四点セットで取り組んでいます。

屋根に猫 秋風すずし すまし顔 卓佐

屋根に猫 風にすずしく 首を振る 亨

これは教室の窓の向うを見ながら、三年生の二人が即興で作ってくれた俳句です。蕪村の「夏河を越すうれしさよ 手に草履」を紹介した週のことでした。誰に頼まれたわけでもなく、手に草履、手に草履と言っているうちに、「一句浮かびましたぞ」という感じでできました。一句目の作者は、「秋風すずし」のところまではすぐ浮かんだのですが、その後はしばらく自分の言わんとすることにふさわしい言葉を探しているようで、できかけの句を大事に大事に産もうとしているようでした。そうして出てきたのが、「すまし顔」でした。三年生なのに見事なので驚きました。そこで「ぼくも、ぼくも！」という、もう一人の生徒が作ってくれたのが二句目です。「俳句を作りたい！」という素直な気持ち表現できていると思います。そうした二人がまた実にいいコンビに見えたのでした。

春学期は、春と夏の俳句を十ほど紹介しました。耳で覚えたことは、書いて記憶を補強できるので、それをまた宿題に出しています。ある生徒に聞くと、新しい俳句なら四行、覚えているものでも最低一行は書いてきているそうです。私もそのようにして覚えるのがいいと思います。

覚えてしばらくしてから、二チームに分かれて「対決」することもあります。ホワイトボードの前に出てきて、間違わずに書けたら一点です。漢字ひらがなを問わないので、ひらがなで書いた方が確実なのですが、頼まれもしないのに、漢字で書こうとしているところが、3年生らしいです。それならばと、漢字が一つ入っているごとにプラス一点にしようということになり、そうなれば俄然、変換できる所はみな漢字にしようという意欲に火がつかしました。「ぼく『夢』っていう漢字書けるで！」といった調子で次々と書き出します。漢字を書けることは彼らにとって誇りであるようです。「芭蕉」や「蕪村」はもとより、「のたりかな」の「かな」までどう書くのかを聞き出して、立派に「哉」と書いている調子です。そのような興味は、いつまでも大事にしていきたいと思います。

一方、辞書にも興味が出ています。しかしまだ探している言葉が指の下にあっても「あれ、のってへん！」というような状態です。その彼らが辞書を嫌いにならないように、ぜひ好きになってもらえるように、じっくりと引き方を教えています。たとえば「み」と「ね」、どちらが辞書で先に来るかといった、ひらがなの五十音順の練習から入っています。

最後の時間は、書き取りと朗読の練習をしています。柳田国男『日本の昔話』(新潮社)の中から、二百字程度の短い話を、全ての漢字にルビを打ってから使用しています。

書き取りでは、集中してもらうため、一字でも間違いがあれば一からまた書き直す、というルールにしています。ただし難しい漢字はひらがなに直してよいことにしています。三年生にとって、手本そっくりに書き写すということは、初めてに近い挑戦なので、手本を横に置くという習慣を教えることから、じっくりと付き合っています。

朗読もまた、間違えたら最初から読み直すことにしています。書き取りよりは多少負荷が軽いですが、一回で合格する人はまずいません。そして「アウト」になると悔しくて仕方がない様子で、「じゃあまた来週」と言って終わろうとするといつでも「え～～！」「お願い、もう一回だけチャンス！」と懇願され、結局合格するところまで付き合うことになります。そしてその間、早く合格した人は、さらにダブルの合格を目指すというふうにして遊んでいます。案の定、ダブルの合格者が現れると、他もダブルで合格したくなって「もっと」という調子になります。そうこうしているうちにこの間はトリプル、カドラプル(生徒の言葉ではダブルダブル)まで現れました。そのような「飽きるまでもっとしたい」という気持ちは、将来大事にしていきたいと思います。

(文責 福西亮馬)

## 「ことば」4年生 担当 浅野直樹

昨年度から引き続きこのクラスを担当することになりました。最初の頃は幼さが抜けなかった生徒たちももうすっかり高学年らしくなってきました。

それとともに授業の内容も高度になりつつあります。これまでは1回で読める分量の本しか読みませんでしたが、今学期は3ヶ月かけて1冊の本を読みきりました。その本とはサン＝テグジュペリ著の『星の王子さま』です。名作だとの評判も高く、お読みになられたことがある方も多いと存じ上げます（私も小さい頃に読んだ記憶があります）。分量が適当であり、数年前に著作権保護期間が終了したためいろいろな翻訳が出回っているところだということもあって選びました。

この本は子供向けとされてはいますが、その内容となるとむしろ大人向けであると言えるでしょう。作中にはいろいろな大人の姿が描かれているのですが、それを実感するようになる大人になってからのことでしょうか。生徒たちと一緒に読み進めていく中で、私のほうが感じ入ってしまったことが多々ありました。そういった意味では難しい本かもしれませんが、著者の伝記的な事実を併せて紹介するなどして、より深い理解を目指しました。

さらに、『星の王子さま』の内容と関連づけて、自分の身近な体験を作文してもらおうともしました。この課題にはかなり苦しんでいたようです。こちらから問いかけをして会話をしているときにはいろいろなことを考えているのですから、それを少しずつ書き言葉にできるようになってもらいたいです。人に伝えようとすることは物事を理解するための一つの大きなやり方ですから。

本を読むだけでは退屈しかねないので、漢字の練習をもう一つの軸に据えました。小学3年生までで生活に最低限必要な漢字を習ったことになります。そういうわけで、漢字検定の8級から試しに始めてみました。今までに習った漢字ばかりから出題されるので、自分の能力をふりしぼって取り組むことができ、充実感を味わっているようでした。思い出せない漢字があるとすぐにあきらめるのではなく、そこで立ち止まって考えて、思い出せるということがしばしばあったのが印象的でした。年を取ると、ぱっと思い出せない漢字はいくら考えても思い出せないことがほとんどなのに、小学生くらいのときはそれが思い出せるほど柔軟なのです。ちなみにこのクラスの生徒はみんな過去問で8級は合格することができ、7級に挑戦している生徒もいます。

ところで、このクラスで漢字検定に取り組んだことから波及して、ある親御さんが漢字検定の2級を受けようとしているという噂を聞き及びました。親子そろって漢字検定を受けるといふ姿はなかなかよいものではありませんか。親の威厳を示すいい機会になるかもしれません。算数や理科ですと、どうしても学習直後の生徒のほうが有利ですが、漢字なら少なくとも中学生くらいまでは負けないでしょう。

蛇足ですが、特に最近の若者は、物心ついたときからパソコンや携帯電話が普及しているためか、漢字力が低下していると言われていています。それは私が他所で教えているときにも感じることであり、大学入試の勉強の前に漢字の練習をしようかと本気で話し合ったりしているほどです。そうならないためにも、小学生の間から漢字をきっちりと練習しておくことをお勧めします。

今学期の『星の王子さま』は教える側にとっても難しかったです。頭ごなしに解釈を押し付けるのもおもしろくないですし、かといって表面をなぞるだけでもつまらないですから。これからもそうしたさじ加減を探りながら、授業を進めていきたいと思います。

（文責 浅野直樹）

## 鉛筆と辞書

今年度のことばクラスは、小学校高学年クラスも中学生クラスも、アラスカをフィールドにして写真を撮り、エッセイを書いた星野道夫氏の作品を読んでいます。小学生クラスは『旅をする木』、中学生クラスは『長い旅の途上』です（いずれも文春文庫）。いずれのクラスも、テキストの内容に関して授業したのち、かなり長い記述を必要とする問題について考え、解答してもらっています。

ところで、授業をしていて気づくのは、小学生クラスでは鉛筆を使うのに、中学生クラスになるとシャープペンシルを使うようになってくるということです。確か僕もシャープペンシルは中学生になってから使い始めたような記憶があるので、鉛筆とシャープペンシルの分かれ目はだいたい小学生と中学生の間に置くことが出来そうですが、どうでしょうか。去年まで小学生クラスで鉛筆を使っていた生徒が、中学生になって真新しいシャープペンシルを使っているのを見ると、少し不思議な気持ちになります。

このような変化はなぜ起こるのか。確かに、鉛筆は書いているとだんだん線が太くなっていくので削らないといけないし、授業中に鉛筆削りをゴリゴリするのも気が引けるので常に数本尖らせておかないといけないとか、いろいろ不都合に思えることがあります。いちいち鉛筆を取り替えていると気が散ったり考えたことを忘れてしまったりというのもあるでしょう。一方、シャープペンシルなら太さはいつも一定で、芯が折れても替え芯を何本か入れておけばよいし、それに見た目も鉛筆よりかっこいいかも知れません。形や色のバリエーションは鉛筆に比べて豊富にあり、選ぶのもちょっとした楽しみです。

しかし、学習ということに関していうと、シャープペンシルでは見えにくくなるのがひとつあります。それは、どれだけ書いたか、ということです。鉛筆は、当たり前ですが、書けば書くほどちびていきます。そのちびた部分が、つまりは書いた量であり、言い換えれば、書いた量と鉛筆の長さの間には相関関係があって、ちびた鉛筆が多くなればなるほどたくさん学習しているということが言えそうです。はっきりと目に見え、手に持って長さや短さが感じられるという点において、鉛筆は学習量のバロメーターのようなものといってよいかも知れません。これがシャープペンシルになると、ほとんど実感が湧かないような気がします。もちろん、どちらを使うかは個人の好みではありますが。さて、授業では例年のように漢字検定の問題にも取り組み、小学生クラスは5級、中学生クラスは3級の問題集に挑戦しています。小学生クラスは初めての取り組みであるせいか、当初から悪戦苦闘している様子ですが、よい機会なので辞書の引き方から始めて国語辞典・漢和辞典の活用の仕方を実践的に習得することを試みることにしました。一年後、彼らの辞書は手垢で真っ黒になり、たくさんの書き込みや線引きがなされ、それに応じた実力がついてはいるはずですが。

中学生クラスは昨年度までの蓄積を生かし手堅く得点出来ているようですが、四字熟語が難関という印象です。意味を覚える必要があるのも解答を難しくしている要因のひとつだと思いますが、もしその四字熟語が故事成語なら、その成り立ちを知ればいっそうの興味を持って覚えることが出来るのではないのでしょうか。熟語を構成する漢字のどれかひとつについて漢和辞典の該当項目を引けば、その簡単な意味と説明が書いてあり、場合によってはそこに典拠も出ていることがあります。

例えば「温故知新」は「温」や「故」を引いたときに見出され、読み方として「ふるきをたず（づ）ねてあたらしきをしる」などと書いてあり、意味として「前に習ったことや昔の事をよく復習・研究して、新しい道理・知識を得ること」（鎌田正・米山寅太郎編『新版 漢語林』大修館書店、1994年、651頁）とあって、そのすぐあとに「論語、為政」と書いてあります。つまり『論語』という本の「為政」というところに「温故知新」という言葉が出てくるということです。そして『論語』は岩波文庫などで簡単に手に入れることが出来ます。いつも使う辞書が未知の本への出会いを準備してくれるとすれば、それもひとつの「温故知新」と言えるかも知れません。

鉛筆も辞書も、使えば使うほど短くなりボロボロになるものですが、そのことがまさにたくさん学んでいるという証拠です。辞書は常に座右に置いて何度も繰り返し引きましょう。

(某)

# 小学生・かずの部

## 「かず」 1～3年生 担当 下村麻紀子 / 福西亮馬

春学期を振り返って

このクラスは3年生5名、2年生2名、1年生4名という大勢のクラスとなっていて亮馬先生と私の2名で担当させていただいています。

1年生は亮馬先生が1～10の数をさまざまな方法で身につけていけるような問題を作ってくさっています。すぐにドリル、となるのではなくまずどうやって『かず』を知ることが大切なのだと思わせていただきました。最初にかずに対して抵抗感を持つことなく上手に受け入れられていっているように見えます。今、1年生たちが持っている好奇心を育てることがかずに限らずあらゆることに共通してくるのでは、と思います。

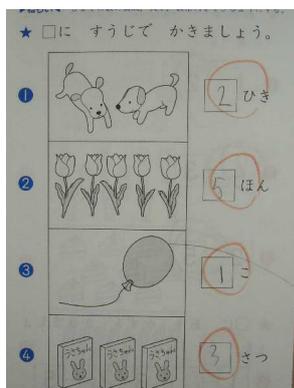
2年生、3年生は自分で選んだドリルやときどきドリルとは別に、数字を使ったパズルなどもしています。計算や文章問題ばかりがかずの勉強なのではなく、さまざまな方法で子どもの中にかずの形を作っています。

2年生はかずのクラスも2年目ということもあり落ち着いています。授業中にもしほかの子たちが少し騒がしくしていても、決してそれに乗っかることはなく静かに問題に取り組んでいます。わからないことがあっても静かに手を上げていたり、先生が見に行くまではほかの問題を解きながら待つ、ということがきちんとできています。時間を上手に使うことが一番できている学年だと思っています。

3年生は、4月から新しく一緒に学ぶことになった子も小学校が一緒だということもあり仲良くやっています。時々ほかの子がどういったことをしているのか気になっている場面もありますが、ひとりひとりが自分は少しずつ解いていく、自分はスピードを重視して解いていく、などの勉強へのスタイルを持っているように思います。自分の勉強のやり方ができていることは今後大きく役立つものになります。

人数が多く友達同士での集まりのせい、手より口が動いていることもしばしばですがその内容は友達が今解いている問題に関することであることが多いように感じます。子どもたちは今、友達が解いているものが自分のわかる問題だと答えを言いたくて仕方がないようで「ぼく、この問題わかんぞ！！」とうれしそうに言っていることもあります。それでも、春学期最初の授業の際にみんなで約束したことを守って答えを言うことはありません。安易に答えを教えてしまって1人だけが成長していくのではなく、たとえばヒントを教えてあげることでどちらも共に成長していける環境がここにはあるのではないかと感じました。

(文責 下村麻紀子)



< 1年生 >

4月当初、「これはなんびきですか？」から始まって、今は0から15までの数を使った足し算・引き算に取り組んでいます。

「先生、できました！」という元気な声のもとへ行って、1ページ1ページ、丸をつけて回っています。これがあの幼稚園の頃に、「先生、何か問題出して！」と言っていた人たちだと思うと、微笑ましく感じるだけでなく、その当時の好奇心が今もしっかりと宿っていることに、たくましさを感じました。

今では全員、1冊目のドリルを達成しています。2冊目もまた飛ぶようにページを繰っています。1冊目ができると2冊目は早いものです。最初は「知らないから楽しい」で始まったことに、だんだん「できるから楽しい」という気持ちが混ざりつつあるようです。

ある生徒は、朝起きると、お母さんも気付かないうちに、ドリルを開けていることがあるそうです。そのように自発的にして来てくれる宿題は、いつもかけがえのない宝物のように思っています。なぜなら計算や知識は教えることができますが、自分からするということだけは教えられるからです。内に宿ったものの素晴らしさに触れながら、その成長を見守っています。(文責 福西亮馬)

ご家庭でされる時の目安 1年の計算(400円程度の1ページ3分以内でできるもので、薄ければ薄いほど良いです)

### < 2年生 >

基本的には、この時期は1年生のドリル(計算・文章題)を勧めています。そこでの十分な勝ち癖は、これから複雑になっていくことをするためのエネルギー源になります。

Eちゃん、丸をつけに行くと、「いっぱいあるよ~、ここにも、ほら、ここにも~」と、屈託なく言って見させてくれます。またドリルとは別の、本人が好きな問題についてプリントを作ると、とても喜んでしてくれます。この間は、学校で今している筆算のプリントを作ってほしいを言うので、それを作りました。

Sちゃんかというと、1年生の時に28冊(!)もドリルをして、とうとう1年生のものが一つもなくなってしまったのでした。そこで今は堂々と2年生のドリルをしています。いつも宿題をうんと頑張ってきてくれるので、「もう一冊終わったの!？」とびっくりしてしまいますが、先生が言った以上のことをしてくるので、たいへん嬉しいです。この間2冊終え、30冊目の賞状を渡したところです。その時にある3年生の男の子が、「Sちゃんは どうしてあんなに賢いんやろなあ？」と目を丸くしていました。本当にすごい一言です。(文責 福西亮馬)

ご家庭でされる時の目安 1年の計算 1年の文章題(400円程度の1ページ3分以内でできるもので、薄ければ薄いほど良いです)

### < 3年生 >

2年生の文章題で、数字を拾って答える段階の次に、+、-、×のどれかという題意を考えるトレーニングをしました。「早く3年生の割り算がしたい」といった要望も、もちろん聞かないわけにはいきません。ただそればかりをして足元がおろそかにならないように、野菜と肉のようにはさみながら取り組んでいます。

また新しく入ってきた3年生たちには、あえて1年生のドリルからしてもらっています。今それを「簡単だ」と思えることが、今後の算数の苦手意識をやっつける免疫機構だからです。

×のところを にするには、それまでのたくさんの自信が必要となります。またその自信は、得意箇所の を にすることで得られます。「引き算」が苦手なら「足し算」を、「割り算」が苦手なら「かけ算」を、「文章題」が苦手なら「計算」を、というように、実際の問題の箇所とは離れていても、自分で頭の動かせる所をして得た自信が回りまわって解決することがよくあります。「自分でも分からないけれども、何とかできる」という状況がそれです。教える側もきつと、できるところを見てあげる方が、ほめる一方となって楽しいでしょう。その教える側の雰囲気はまた算数に対する好意識を作る要因でもあります。焦るとついできないところを先に見てあげようと思いますが、そこは急がば回れだと思います。今立ち止まっている所も、どのみちいつかはできることを信じて、もっと前の所からするのがいいようです。(文責 福西亮馬)

ご家庭でされる時の目安 1年の文章題 2年生の計算 2年の文章題(3年の1学期の計算)

## 「かず」4~6年生

担当 福西亮馬



去年までの「マイル」というポイントを刷新し、今回は「石高」にしています。石高というと戦国時代風ですが、ドリルを1ページするのにつき0.5万石、50万石たまると、日本地図の一つの県が取れるというルールにしています。

みんなそのルールの下に、ガリガリ、モクモク、ドリルをしています。時々、地図の周りに寄ってきては、「よっしゃ!次は新潟を取るっと!あと十万石や」とかけ声を上げたり、「先生、なんか十万石たまる問題作って!十万石以上でもいいよ、だからいっぱい作って!(先生問題は貯まるのが早いです)

といった調子です。それぞれが「あとこうしよう」という自分の目標を掲げながら、張り切って取り組んでいます。(もちろん宿題をたくさんしてくれば、それだけ石高が増えます。)

高学年に上がると、したいことがだんだん増えて来るようになるので、勉強に対する意識も少しずつ変わってきます。たとえば「したいもの」から「しなければいけないもの」というように。しかし「あえて」それを自分から取り組もうとするなら、それは今まで以上に意志のこもった勉強になります。今はまた、したいことにはとことん「凝る」時期です。勉強でもそうしたアクセルを踏んでもらえるようにと応援しています。

(文責 福西亮馬)

ご家庭でされる時の目安(計...計算、文...文章題)

4年生 文2年 計3年 文3年 5年生 文3年 計4年 文4年

6年生 計1~5年 文1~5年

学校英語に自信を持つには、簡単なことを何度も繰り返すことが大切です。例文を繰り返し声に出して読んだり、白い紙に何度も例文を書き写したり、といった基本的なドリルを怠ると、必ずどこかでつねを支払わないといけません。できればコツコツ小分けにして借りを返していくのが得策です。試験前の一夜漬けでは後が続きません。小学生の「ことば」同様、中学生に対しても、私のモットーは変わりません。「簡単に思えることを何度も繰り返せば自信がわいてくる」ということです。学んだ内容が知識として定着しているかは、英作文の形式で確認しています。どの学年のどの生徒も既習事項について（中3であれば、中1、中2の既習事項について）英作文のドリルを繰り返します。英単語は知識として暗記することも大切ですが、漢字と同様に言葉の成り立ちを知ること大切です。ギリシア語、ラテン語に遡るいわゆる語源の知識についても、勉強が単調にならないために、また、英語を含めた語学そのものに興味を持ってもらうために、折を見て話すようにしています。

（文責 山下太郎）

### ～コラム～ 『学生・学校』

中学英語の基本的な例文に I am a student. というのがある。「私は生徒です」と訳せば試験では正解である。確かに student と言えば「学生、生徒」を意味するが、この言葉は、「熱中する、努力する」という意味のラテン語 studeo（ストゥデーオー）に由来する。したがって、本来の意味に即して student を訳せば、「熱意を持つ者、努力する者」という意味になる。また、student に関連した名詞 study は普通「勉強、勉学」と訳すが、そのルーツは「熱意」や「情熱」を意味するラテン語の studium である。

「強いて努める、精を出す」という意味を連想させる「勉強」という漢字も、元来は「強制」でなく、むしろ個人の「自発的な意思」を示唆する言葉である。日本語では、商品を安くして売ること「勉強します」と言うが、精一杯努力する対象、すなわち「勉強」の対象は学問、技術、商売等のジャンルを問うものではない。

ところで、日本語で「勉強」の反対語は何か？と聞くと、たいていの人は「遊び」と答えるように思われる。また、「遊び」に対応する英単語は play である。と。このとき、study の反意語は play でよいということになる。この考え自体はけっして間違いではない。All work and no play makes Jack a dull boy.（よく遊び、よく学べ）という英語のことわざはこの考え方を裏付ける。しかし、英語の語源に照らすとき、study と対比すべき言葉として、「情熱を失った状態」を意味する apathy（無感動）や indifference（無関心）を考えてみたくなる。

なるほど play という語は「遊び」と訳すことが可能であるが、同時に、人間が情熱を傾け、夢中になる営みと不可分である。例えば、名詞として「劇、演劇、芝居」、「スポーツの競技」という意味があるし、動詞の場合も「（スポーツを）する」とか「（音楽を）演奏する」といった意味もある。現代日本語で言う「遊び」はどちらかと言えば、緊張やストレスにたいする弛緩や気晴らしを意味するように思われるが、英語の「プレイ」はもっと能動的で積極的な行為を指す。実際、スポーツ選手のことを英語ではプレイヤーと言うが、それを直訳して「遊び人」と置き換えたのでは、言葉の上でどこか違和感が残るだろう。

ところで、人類の学名は Homo sapiens（ホモ・サピエンス）というラテン語 - これは「知恵のある人間」（または「人間は知恵を持つ」という意味 - であるが、これにたいし、オランダの学者ホイジンガは、Homo ludens（ホモ・ルーデンス）と定義した。その意味は「遊ぶ人間」（または「人間は遊ぶ」となる。ホイジンガは、「遊び」が人間文化の本質と密接に関わるものであり、人間を特徴付ける大切な行為とみなした。しかし、ラテン語の ludens（ルーデンス）は、その名詞形 ludus（ルードゥス）とともに、芝居や詩歌など、人間の文化を生み出す活動を含意するのであり、この点で英語の「プレイ」と似たニュアンスを持つ。つまり、Homo ludens は、単純に「遊ぶ人間」、「遊び人」と訳しきれない様々な意味を内包している。

蛇足ながら、今触れたラテン語の ludus（ルードゥス）には、「遊び」以外に子供達の通う「学校」の意味もある。同様に、英単語の school（スクール）は、ギリシア語で「暇」を意味する スコーレー に由来し、ルードゥスとイメージの重なりを持つ。ちなみに、「学者」を意味する scholar（スカラー）も、この スコーレー と関連した言葉である。漢字の「学者」が文字通り「学ぶ者」を意味するのにたいし、スカラーには「暇を持つ者」というニュアンスが認められる。強いてスカラーの反対語を英語で考えるなら、「忙しい」ビジネスマン（business man）ということになるだろうか。

しかし、school が「何もしないでもいい暇な場所」でないように、scholar も、「することがなくてぶらぶらしている人」を意味するわけではけっしてない。business に心を煩わすことなく、心にゆとりをもって「真理」の探求に人生をささげる人こそ、本来の意味で scholar と呼ばれるに値する人であろう。

（文責 山下太郎）

## 1年生クラス

今年度から中学校に進学し、新しい生活が始まった生徒のクラスです。とはいえこの山の学校には以前から通っていたので、こちらは今までからの延長という感じが強いです。学校で習うことへの理解を助け、初めての定期テストでよい流れを作ることを目指していました。

ところがこの予定はいきなり予想外の事態に直面しました。学校での進度があまりに遅く、その復習を中心にするわけにはいかなかったのです。そこで学校とは別にこちらで最初から教えることに決めました。

内容は正の数・負の数です。初めは基本的な足し算や引き算でも戸惑いを見せていましたが、すぐに確実にできるようになりました。しかし、計算問題の中に小数や分数が混じると間違えることもよくありました。それらは小学校の範囲ですが、忘れかけていたようです。数学では小学校で習う内容がさりげなく出てくるので、小学校の復習も継続して忘れないようにします。

総じて理解は早く、文章題もそれほど苦にする様子ではありませんでした。予想より早く定期テストの範囲まで終わったので、何度も復習をしました。こうして万全を期してテストに送り出したつもりだったのです。

ところが結果を聞くとそれほどよくなかったようです。その理由はすぐに明らかになりました。時間が足りなかったのです。複雑な計算もほぼ確実に解けはするのですが、その反面時間はかかるのです。これからは計算速度を上げるように意識していきたいです。もう一つの理由は文章題で簡単な読み違えをしていたことです。いくら理解していても、それではわかっているということを伝えられないので、日頃から気をつけたいです。

## 2年生クラス

中学2年生も1学期の最初は計算(代数)の分野です。式の計算と連立方程式で、それぞれ1年生で習った文字と式、一次方程式の発展段階です。だから1年生の範囲をしっかりと理解していないと苦労します。逆に言うと、しっかりとした理解を積み重ねているなら比較的楽な分野です。

このクラスの生徒に関しては、どちらとも言いがたい状況でした。基本的な計算のルールはわかっているけれども、少し複雑なものになるとお手上げになるという様子です。横についている私にその都度聞いてもらい、説明をするとその場はできるようになるのですが、またしばらくすると似たような問題で困るということが何度もありました。それはもちろん誰もが通過する過程であり、困惑と間違いを繰り返しながら練習を重ねるしかありません。特に計算は繰り返すうちに自然とできるようになり、やりがいも感じられるはずですので、継続して取り組むべきです。部活などもあるでしょうから毎日練習することは難しいでしょうが、少なくとも山の学校に来る日と、学校の宿題を全てするようにしましょう。

2年生のこの時期はちょうど式の計算と方程式を同時に習うのでその区別をはっきりとさせておくとういでしょう。両者の区別については今までにも多くの生徒から質問され、実際、今回も聞かれました。その違いとは、形式上は「=」がないかあるかであり、計算の規則としては、小数や分数のまま計算するか全ての項を等倍するかであり、そもそも目的が、式そのものを計算するかある未知数(x,yなど)を求めるかというものです。

すこし話はそれますが、この違いを区別することは、絶対的と相対的との区別にもつながります。例えばテストにおいては、合格点を80点に設定してそれを基準にして考えるのと、入試や偏差値のように全体での位置づけを考えることとの違いです。さらに飛躍を許していただけるなら、ある事象を個人から考えるか、社会から考えるかという昔からある問題にも突き当たります。例えば失業について、個人の要因から説明しようとするか、社会の要因から説明しようとするかといった対比です。どちらかだけが正しいのではなく、それらの違いをはっきりと認識しておくことが大切なのです。

ときにはこんなことも考えながら、日々の課題に取り組んでもらえれば幸いです。

(文責 浅野直樹)

## 「数学」中3・数の基本 担当 福西亮馬

授業では、中学校で習う内容のすべてを「代数」「解析」「幾何」の三つの領域に分け、ファイルにして渡しています。中学校での「代数」は式の計算、「解析」は関数とグラフ、「幾何」は計量と図形の証明です。

春学期はそのうちの「代数」のほとんどをすることができました。習った当時よりも今の方がかなり「できる」ようになっていました。そのことを確めるのは自信がつかますし、また足がかりを作るという意味でも重要です。しかし一方、復習では、当時のまま放っておかれている癖のあるミスもまた見つかりました。こういう時は、プリントだけではなかなか補えないので、必要な問題を手書きで出して解いてもらえるようにしています。

1年生の範囲は、量が多くて大変でしたが、私が息抜きのつもりで3年生の所を先にするかと聞いてみると、生徒のMちゃんはため息をつきながらも「うん、1年生のところをやってしまっただけ」と言ったことが今でも印象に残っています。その後大変頑張ってくれたと思います。

3年生では、1年生、2年生の復習が何より大事です。しかし闇雲に解き散らかすのではなく、つながりのある問題を集中的にし、体系的な理解を得ることが望ましいでしょう。そうすることで「ここからは忘れない部分」を作ることができます。それがあれば、次第に雪だるま式に勉強が分かってくるだろうと思います。

夏休みも、引き続き復習に取り組んでもらえることを期待します。(文責 福西亮馬)

## 「数学」高校・数の世界 担当 福西亮馬

高校の数学は、よく「分からない」と言われますが、「読書百篇、意自ずから通ず」という言葉があるように、「すぐに」ではなく「何度も繰り返せば、いずれ」分かるという姿勢が大事だと思います。

さて今学期は、主に微分積分をしました。テキストは学校の問題集のサクシードをしています。そこで扱う関数のクラスも、 $x^2+x+1$ のような多項式から  $x$ 、 $\sin(x)$ 、 $\cos(x)$ 、 $e^x$ 、 $\log(x)$ といった解析関数にまで広がります。

微分の方で、最大の難関は、「関数の概形」です。それには増減表を書く必要があります。そして1階微分、2階微分と求める必要があります。もし  $f/g$  を含む分数関数の場合、特に計算が煩雑になります。つまり商の微分を使うと、 $(f/g)' = (f'g - fg') / g^2$  となり、さらにこれを微分すると分母をまた二乗しないといけないので、大変な仕事です。しかしここでもし、 $f' \cdot g^{-1} + f \cdot g^{-1'}$  とすると分数の微分を回避できることを、生徒のT君自身が見つかりました。それ以前に  $f/g$  の微分を学校でたくさんしていたということで、少し自信があるようでした。おそらく今の発見は繰り返しによる褒美のようなものだったと思います。

一方、積分の方は、さらに計算が激しくなります。置換積分は、何を置換すればうまくいくかに慣れるまでは試行錯誤が要りますし、部分積分は、解いたはずがまた積分が出てくるので、混乱しやすいです。さらに、似たような関数の、どれが置換積分で解ける問題で、どれが部分積分で解ける問題かを見分けるのはほとんど無理に近いでしょう。粘り強く頑張るしかないところです。そうしているうちに、「この時はこうすればよい」という発見がまたあると思います。

また今の努力は、大学に入ってから多少報われると思います。大学では微分積分は既知とされ、高校レベルの問題の演習時間はほとんど設けられていません。おそらく今のレベルがそのまま今後のポテンシャルとなるでしょう。それなので、むしろ貯金するような感じで前向きに取り組めるといいと思います。

(文責 福西亮馬)

### ラテン語入門

この春学期は希望者がなく、開講されませんでした。入門文法は基本的に一度限りとなりますので、希望者がいないときは開講されません。希望者が少ないと、マンツーマンでのご指導も可能となります。ラテン語を学びたい方は、ぜひ一度お問い合わせください。

ラテン語は、時々「ラテン・アメリカの言葉」と勘違いされている方もいらっしゃいますが、紀元前後頃に古代のローマを中心として使われていた言葉です。ローマ文化はギリシャ文化と並んで西洋文明の基礎であり、それを支えていたのがラテン語(そしてギリシャ語)です。古典ラテン語の著作についても近年日本語訳が進み、内容に触れることがだんだん容易になってきました。

しかし、やはり原文に触れることは大きな喜びです。「完全な翻訳はない」と言われますが、ラテン語でも同様です。日本語訳を参照しながらであっても、ラテン語原文を読めると、また違った味わいがあります。「この言葉は、こんな風にかかれているのか！」という発見は、取り組んだ人だけが味わえる楽しみです。

ラテン語の文法は、古代の言葉ゆえ、やはり易しいとはいえません。しかし、山の学校では4ヶ月で初級文法を終えることが可能なカリキュラムを取っています。文法を終えた後は、日本語訳を参照しながらラテン語原文を理解することが可能になります。ラテン語は、一度に沢山は読めません。だからこそ、一生涯の楽しみとして続けることができます。

あなたもぜひ、ラテン語の世界に足を踏み入れてみませんか。(文責 前川 裕)

### ラテン語・初級講読

春学期では、4世紀の神学者アウグスティヌスの『告白』を読みました。冒頭から読み進め、折に触れてキリスト教的な背景、思想的な知識の解説を織り交ぜています。基本的に短い文が多いのですが、時には長い長い文が現れ、ラテン語教師であったというアウグスティヌスの実力を伺わせられます。司教であっただけに神賛美の言葉がたくさん続き、また神への呼びかけとして2人称が多用されます。内容にはあまり深くは入りませんが、味わう価値のある文章だと改めて思われました。

今期は、大学院生と講師のマンツーマンでの講読でした。人数が少ないこともあり、クラスは和やかな雰囲気です。

次の学期に読むものは未定です。受講希望の方々の希望を踏まえて、テキストを決めたいと思います。初級文法を終えた程度であれば十分に参加できますので、独学で文法をやったが読解の基礎を固めたいという方にもお勧めします。

(文責 前川 裕)

# 「ラテン語中級講読」

担当 山下太郎

## ラテン語・中級講読 A

このクラスではキケローの作品を読んでいます。すでに『老年について』と『アルキアース弁護』を読了し、今は『友情について』を読んでいます。「友人は第二の自己である」、「真の友情はまれである」など数多くの名句や警句に満ちた作品です。キケローの原文を読んでいると、文法や語彙の知識だけでこの作品の魅力を感じ得ることはできないという当たり前の事実を痛感させられます。キケローに限らず、古典作品読解の基本とは、読者自身の「思索を楽しむ気持ち」に尽きると言えるのではないのでしょうか。それが真の意味での「スコレー(ゆとり)」ということであり、「学校(スクール)」の語源も元来そこにあるはず。「友情」という身近なテーマについて、よくぞここまで深い議論を展開できるものだと感じながら、ちょうど今、全体の3割程度まで読み終えたところです。(文責 山下太郎)

## ラテン語・中級講読 B

このクラスではウェルギリウスの作品を読んでいます。すでに『牧歌』を読了し、今は『農耕詩』を読んでいます。ドライデンをして「最高の詩人による最高の詩」と言わしめた傑作です。全部で2000行ありますので、3,4年かかる計算ですが、ワインを味わうようにじっくり丁寧に読んでいます。『農耕詩』が終われば、いよいよ『アエネーイス』(ヨーロッパ古典を代表する英雄叙事詩)に挑戦します。これは1万行の作品なので20年以上かかりますが、なんとか読みたいと考えています。古典の読解はそれ自体に意味があるので、どこから始めてどこで終わってもよいと思います。途中参加は大歓迎です。Festina lente. (ゆっくり急げ)をモットーにして取り組んでいきたいと思っています。(文責 山下太郎)

## 第10回 ラテン語のゆうべ



「ラテン語は楽しい」(無料)

8月24日(金) 午後8時10分~9時30分

講師 山下太郎

場所 北白川幼稚園・第3園舎

対象 ラテン語に関心のある方

### 講師からのメッセージ

- ・ラテン語は日常の中に息づいています。映画やCMで見かけたあの言葉、この言葉。ラテン語を語源とする英単語はたくさんあります。合唱をされている方は、歌詞そのものがラテン語ということもあるでしょう。できれば、歌詞を理解した上で歌いたいと思われるかもしれません。
- ・今回「山の学校」では「ラテン語の夕べ」と題し、ラテン語の魅力にふれていただくひとときをご用意致しました。教科書も、ノートも要りません。「ラテン語はおもしろい!」と言ってお帰り頂けることを何より願っています。この機会にどうぞお気軽にお越し下さい。

神々がどんな死を僕や君にお与えになるのか、  
レウコノエ、そんなことを尋ねてはいけない。  
それを知ることは、神の道に背くことだから。  
君はまた、パピュロンの数占いにも手を出してはいけない。  
死がどのようなものであれ、それを進んで受け入れる方がどんなにかいいだろう。  
かりにユピテルが、これから僕らに何度も冬を迎えさせてくれるにせよ、  
或いは逆に、立ちはだかる岩をものともせず、  
テュッレニア海を疲弊させている今年の冬が最後の冬になるにせよ。  
だから君には賢明であってほしい。  
酒を漉（こ）し、短い人生の中で遠大な希望を抱くことは慎もう。  
なぜなら、僕らがこんなおしゃべりをしている間にも、  
意地悪な「時」は足早に逃げていってしまうのだから。  
今日一日の花を摘みとることだ（カルペ・ディエム）。  
明日が来るなんて、ちっともあてにはできないのだから。

ホラーティウス『カルミナ』1.11

この詩には、若さが死の恐怖を吹き飛ばすような力強さが感じられる。その中で語られる「カルペ・ディエム」という言葉のニュアンスについては、原文を直訳することで、日本語の「一期一会」とは別のイメージが湧くことと思う。

まず「カルペ（carpe）」というラテン語は、基本的に英語で pluck（摘む）という意味をもつため、目的語に「花」（flores）がくることが多い。「カルペ（carpe）」は命令法なので、この言葉を目にすると、読者は瞬時に目的語が何の花なのか、想像を巡らせる。だが、目的語は「ディエム（日）」であって、「フローレース（花）」ではない。

つまり、「一日」と「花」がイメージの上で重なり合うことで、「一日を花とみだてて生きよ」というメッセージの背景が視覚的に用意される。一日一日を生きる我々は、さながら花畑で花を摘む者であるかのような。人生に何らかの目的を設定し、努力してそれを克服することは素晴らしい。しかし、「カルペ・ディエム」は我々に努力や忍耐を促すのではなく、むしろ人生の美しさそのものを味わうよう誘う言葉であると感じられる。

引用した詩句の中に、「君には賢明であってほしい」という言葉がある。これは、ホラーティウスの親しんだエピクローロス哲学を反映しているといわれる。ギリシアの哲学者エピクロースは快樂主義の祖とされるが、彼の説いた「快樂」とは、けっして刹那的で享樂的な快樂を意味するのではない。一言で言えば、日本語の「知足」や「清貧」といった言葉にこめられた「わずかなものに満足を知る心」に幸福の原点を見た。

この考えとの関連で「カルペ・ディエム」の意味を再び問うなら、ホラーティウスは「人生の長い、短いに執着するな。かりに今日一日しか生きられないとしても、この世に生まれてよかったと満足できる生き方を選ぶがよい」と諭しているようにも感じられる。

（文責・山下太郎）